

# 嶋満神社便り

平成二十六年三月号(第十一号)  
発行 嶋満神社奉賛会

## 市指定文化財

―津田家新田開発関係文書―

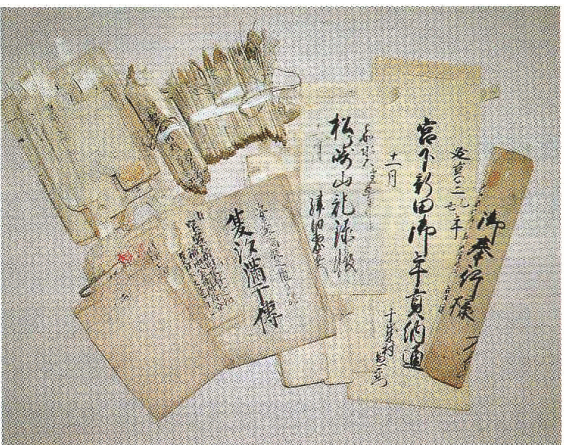
広報まいづる二月号にも紹介されてきましたように、津田様宅に伝わる浮島周辺の新田開発の様子を記した古文書一六点がこのほど舞鶴市の文化財に指定されました。

特に絵図については広報にこう述べています。「浮島と祖母谷川、志楽川河口部周辺の新田開発や祖母谷川の背替えが新田開発と一体となつて行われたことを示す点でも重要な資料」

・・・難しくてようわからん???

ほら、三年前に当奉賛会で作成しました「浮島嶋満明神の縁起」に綴じ込みましたあの絵地図(コピー)のことですよ!

文化十年(一八一三)と文久元年(一八六一)の浮島周辺の絵地図を比べると、後者では浮島の山の周りが海からすっかり田地に代わっているのがよくわかります。



▲津田家新田開発関係文書 (広報まいづる2014.2)

二〇〇年以上前に苦心を重ねて入り江を田

地にし、その後グラウンドや公会堂、温泉ができて憩いの場、さらに宅地となったのを戦争で軍にとられ、戦後は映画館や府の振興局などが建つ中心市街地に。今また長い間その中核をなしてきた市民病院が医療再編で春には移転、あとに何ができるのか公開の検討委員会で「すったもんだ」・・・八幡さんはすべて見てこられたのですね。今回の古文書は正にこの浮島の「思い出のアルバム」の栄えある第一ページということができるとしよう。

今回の指定を浮島住民として誇りに思う次第です。

―幕末のハイテク装置「ひとりばん」―

さて今回指定の古文書の中には浮島入り江の干拓に当たつての苦労や決意も読み取ることができます。昭和四十七年に故高橋卓郎先生が新舞鶴校在任時に調査、発表された資料にはそのあたりがわかりやすく解説されています。

開発に当たつた津田惣右衛門、惣左衛門兄弟及びその子孫は松ヶ崎山の松材で杭を打ち石垣を組んで堤防を築く、排水路を走らせる。塩害を防ぐために溝に設けた自動排水の水門装置の名を「ひとりばん」と言いました。現代のハイテク装置に「〇〇君」と名付けるのと同じ発想でおもしろいですね。

またこのときにまとめられた潮の満ち干の資料の科学性を当時の舞鶴海洋气象台に鑑定依頼したところ、「現代の潮汐表と対照しても驚くほど正確なものであった」との記述が京都新聞記事に残っているそうです。

幾世代にもわたって人間の営みが続けられてきたこの浮島の地を、山上の古木の間から改めて見下ろすのも感慨深いものがあってよいのではないでしょうか。

※これらの資料は非公開ですが、「嶋満明神の縁起」に発表済みのものや高橋先生の資料などは谷岡にお申し出くださればUSBなどデータの形、メール送信などでご覧いただけます。